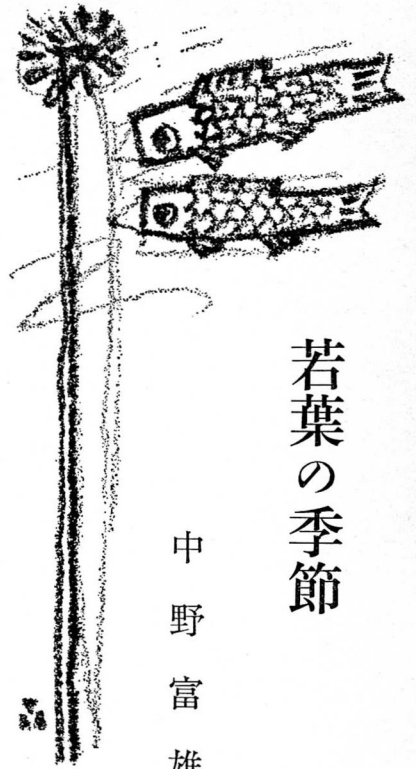


若葉の季節

中野 富雄



北海道に長く暮して、東京へ来て見ると、騒音や空気の悪さに閉口するが、こんな都塵の中でも、春ともなれば、街路樹が目にも泌みる様な新鮮な新緑を、誇らしげにひろげてくれるのは有難い。木の葉は秋にのみ散るものだとウカツにも思いこんでいたが、潤葉常緑樹は、春に新芽が出揃うと古い葉を落す。八ツ手の黄ばんだ葉が重たげにハラリと落ち、椎の木や樟の、都塵に黒ずんだ古葉が、カサカサとアスファルトの上にこぼれて、新緑の季節が始まる。

生垣のアオキのつややかなみどり、街路樹のイチョウウの浅緑、中でも樟の木の浅みどりは、胸が広がる様なあざやかさだ。椿の残り花も落ちつくし、モクレンもすっかり若葉の粧いを凝らして、ツツジの紅、コデマリの雪白が、緑一色の中にあざやかにういて、見るからにさわやかである。鯉のぼりが風に流れるゴールデンウィークから、五月暗れの日が続いて、五月の東

京はさすが江戸ッ子が「目に青葉山ほととぎす初鰯」と自慢しただけはある。然し、ほととぎすならぬサイレンのけたたましさは、こんなに群って暮したがる人間の愚しさを思い知らせる様で、耳を覆いたくなく、たまにはこんな環境からぬけ出して、心の洗濯としゃれこみたくなる。

千葉の農場へ出かけて見ると、ここへも又、工場、住宅の建設の波がヒタヒタと押しよせて来て、あちらこちらにブルドーザやクレーンの唸り……然しさすがは広々として、静かで、そして全く新緑の中に包まれ、母なる懐に抱かれた様な思い。この前訪ねた時は、豪華な八重桜が霞んでいたが、今はあざやかな緑の世界、放牧地の牛群も、心なしかすっかり安心しきった様に草を喰んでいる。

今年の春は、乾燥気味であったが、前年からの手入れの甲斐もあって牧草の伸びは素晴しい。

種々の牧草の中で人目をひくのは、マンモスイタリアンライグラスの伸び方だ。ここ数年の試作でその秀れた能力が確認されて来たが、今、若葉の季節を迎えて、力強く伸びている姿を目のあたりに見ると、改めてその良さが判る。牧草づくりの技術は逐年進歩して一〇、二〇の生産も夢ではなくなったが、更に増収を安定させるためには、能力高い品種の選択が必要となる。府県に於ける牧草としては、イタリア

ンライグラスほど急速に普及し、実効をあげたものはない。それはイタリアンライグラスが使いやすいと多取であるからにはかならず、更に品種的にマンモスイタリアンライグラスの如き高能力の系統が現われたことは將に「鬼に金棒」といえる。つやつやと光る葉をひろげているマンモスイタリアンライグラスを見ていると、太陽のエネルギーを満喫しているようだ。この若さ、このたくましさも、私も胸一杯に吸いこんだ。

(東京支店長)



右手前=マンモスイタリアンライグラス 左=在来イタリアンライグラス

千葉農場にて 5月2日うつす